

平成 28 年度 筑波大学審査学位論文（博士）

パーソナリティ障害傾向における
自己・他者・関係性に対する認知の特徴
——個人の認知過程と対人間の認知過程の検討——

筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻

市川 玲子

論文要旨

パーソナリティ障害 (PD) は、主に自己の機能障害と他者との関係性における機能障害によって特徴づけられ、その根底には、非柔軟かつ非機能的なスキーマに起因する認知的特徴が存在すると考えられてきた (Beck et al., 2004)。そして、PD の特徴は、非臨床群においても、個人の認知過程や他者との相互の認知における様々な葛藤を引き起こすことで、対人的適応を困難にすることが明らかにされている。しかし、その概念的 position づけの曖昧さによって、量的研究に基づいた実証的知見が不足しており、非臨床群における周辺群の理解・援助に資する知見も乏しいことが問題点として挙げられている (江上, 2013)。本論文では、PD を、臨床群-健常群間の量的連続性を仮定した概念として position づけ、各個人が有するそれぞれの PD の特徴の程度を「PD 傾向」と表記することとした。

また、社会心理学の領域では、自己認知と対人関係の質に関する認知が密接に関連し合っていることが指摘されてきた (Leary et al., 1995 など)。臨床的視点に立った Beck et al. (2004) の認知理論においても、PD における認知的バイアスが対人関係上の問題に結びつくことが織り込まれている。しかし、これらの視点を包括的に扱った実証的知見も得られていない。

以上のことを踏まえ、本論文では PD 傾向における自己や他者、他者との関係性に関する社会的認知と対人関係上の特徴について、個人の認知過程と対人間の認知過程の両側面から包括的に検討することを目的とする。本論文では、特に他者との相互作用の中で対人的困難を増強し、精神的健康にも重大な影響を及ぼすことが示されている (Wright et al., 2015 など) 境界性 PD 傾向・自己愛性 PD 傾向・演技性 PD 傾向・依存性 PD 傾向・回避性 PD 傾向を取り上げた。そして、PD の量的連続性と複数の PD 間の概念的オーバーラップを考慮して概念的 position づけを明確にし、また非臨床群の青年に対する理解・援助に資する知見を得るために、一般青年を対象としたアナログ研究を行った。なお、PD の対人的適応に関する先行研究や、青年期における友人関係の重要性を踏まえ、友人関係に焦点を当てた。

理論的検討にあたる第 1 章、第 2 章、第 3 章を経て、第 4 章から実証的検討を行った。いずれの研究も、対象者は一般大学生であった。

第 4 章では、各 PD 傾向と自己および他者に対する評価との関連を検討した。【研究 1】では 2 つの研究を行い、複数の側面・様態の自己および他者に対する評価的感情との関連

を検討することで、本章における基礎的知見を得ることを目的とした。【研究 1-1】では質問紙調査を行い、各 PD 傾向が、先行研究 (Watson, 1998 など) で示されていたように全般的な自尊感情と関連するだけでなく、対人面に関する自己評価や、自己価値の外的要因への随伴性ともそれぞれ関連することを示した。また、自己愛性 PD 傾向は、他者に対する否定的評価感情とも強く関連していた。【研究 1-2】では、質問紙と潜在連合テスト (Greenwald et al., 1998) を併用し、顕在的-潜在的な自己および他者に対する評価的感情との関連を検討した。その結果、特に回避性 PD 傾向について、顕在-潜在間で自己像や他者像の不一致との関連が見られた。続く【研究 2】では、同性の友人との相互評定を通して、各 PD 傾向が高い個人が友人からの評価をどのように予想し、そして実際に友人からどのように評価されているかを明らかにした。結果より、境界性 PD 傾向や回避性 PD 傾向が高い個人におけるネガティブかつ正確な評価予想、演技性 PD 傾向が高い個人における他者評価に対するポジティブバイアス、および依存性 PD 傾向が高い個人における能力面の評価に関する相対的自己卑下傾向が示された。【研究 3】では、【研究 1】と【研究 2】で明らかにされた各 PD 傾向と関連する自己・他者評価の対応関係を踏まえ、その背景にある自己に関連した社会的欲求との関連を検討した。【研究 3-1】では、他者からの評価に対する欲求との関連を検討した。その結果、自己愛性 PD 傾向は他者からのネガティブな評価への志向性と、演技性 PD 傾向は他者からの社会性に関するポジティブな評価への志向性とそれぞれ正の関連が見られた。【研究 3-2】では、各 PD 傾向が高い個人が、そもそも他者の視線や、他者から見られる自己の側面にどの程度注意を払うのかについて、補足的に検討した。その結果、自己愛性 PD 傾向が高い個人はそもそも他者の視線に注意を払わないことと、演技性 PD 傾向・依存性 PD 傾向・回避性 PD 傾向が高い個人は他者の視線を強く意識することが示された。

続く第 5 章では、各 PD 傾向と、対人関係の質に関する認知との関連を検討した。【研究 4】では、他者との関係性に対する認知の基盤となる対象関係との関連を検討することで、各 PD 傾向が高い個人における関係性に対する認知の根本的特徴を明らかにした。その結果、境界性 PD 傾向・自己愛性 PD 傾向・依存性 PD 傾向・回避性 PD 傾向は基本的信頼感の低さや拒絶不安の高さと関連し、さらに自己愛性 PD 傾向・依存性 PD 傾向は対人関係における自己中心的な視点と関連していた。この結果を踏まえ、【研究 5】では、各 PD 傾向と他者との関係性に対する欲求との関連を検討した。まず【研究 5-1】において全般的な対人関係における包括的な欲求との関連を検討したところ、多くの PD 傾向が他者から

拒否されたくないという欲求とそれぞれ関連することが示された。そして、【研究 5-2】では、特定の友人に対する接近-回避欲求（葛藤）およびそれに対する心理的対処反応との関連を検討した。その結果、自己愛性 PD 傾向は親密な関係の構築に対する志向性の弱さと、依存性 PD 傾向と回避性 PD 傾向は友人に対する接近-回避葛藤とそれぞれ関連が見られた。しかし、同様の葛藤に対しても、PD 傾向によって関連する心理的対処反応が異なっていたことから、葛藤に随伴する動機づけがそれぞれ異なることが示された。続く【研究 6】では、【研究 2】と同様に同性の友人との相互評定を通して、PD 傾向と友人間における関係性の認知の差異との関連について検討した。その結果、いずれの PD 傾向が高い個人も、関係性に対する評価において、友人間の差異が見られた。境界性 PD 傾向と演技性 PD 傾向は、特に親密度や関係満足度において友人の評価との差異が見られた。自己愛性 PD 傾向が高い個人の友人は、相対的に否定的に関係性を評価していた。そして、依存性 PD 傾向が高い個人は、友人よりも関係性を相対的に肯定的に評価し、回避性 PD 傾向が高い個人は、友人よりも関係性を相対的に否定的に評価していた。

第 6 章では、ソシオメーター理論（Leary et al., 1995）を踏まえ、PD 傾向と自己評価との間の被受容感・被拒絶感の媒介効果を検討した。まず【研究 7】では、PD 傾向が高い個人における一般他者からの被受容感・被拒絶感と、自己評価や他者からの評価に対する欲求との関連性について検討した。その結果、境界性 PD 傾向・自己愛性 PD 傾向・演技性 PD 傾向・回避性 PD 傾向が高い個人における自己評価は、他者との関係性の質に関する認知に随伴していることが示された。さらに、自己愛性 PD 傾向と演技性 PD 傾向における他者からの評価に対する欲求にも、一般他者からの受容感や拒絶感が関連していることが示された。【研究 8】では、【研究 7】と同様のモデルについて、特定の友人との関係性の認知に焦点を当てた検討を行った。その結果、自己愛性 PD 傾向と演技性 PD 傾向についてのみ、特定の友人からの受容感・拒絶感が自己評価と関連することが示された。

実証的検討において得られた知見を踏まえ、第 7 章では総合的考察を行った。まず、各 PD 傾向と関連する自己・他者・関係性に対する認知の特徴を整理し、その上で PD 傾向間の関連性を論じた。そして、本論文の結論を 3 点にまとめた。1 点目に、各 PD 傾向と関連する自己評価・関係性の認知の背景にある欲求・葛藤の様相を明らかにし、人の生存における重要な社会的動機（Stevens & Fiske, 1995）や親密性への欲求のみでは必ずしも説明されない動機・欲求との関連を示した。2 点目に、各 PD 傾向が高い個人における自己評価と他者評価の間の様々なパターンの差異を実証し、自己評価と他者評価との対応関係を

明らかにすることで、各 PD 傾向における特徴的な内的・社会的に不適応的な様式を説明することが可能になることを示した。3 点目に、境界性 PD 傾向・自己愛性 PD 傾向・演技性 PD 傾向・回避性 PD 傾向が高い個人の自己評価には、他者との関係性の質に対する認知が寄与することを示した。

これらの結論を踏まえ、本論文の学術的意義と臨床的意義を述べた。具体的には、(1) PD 患者に対する認知的視点からの見立てや介入方法の改良への貢献、(2) 各 PD 傾向と関連する内的適応と社会的適応の区別の困難さ・重要性、(3) PD 間の弁別や鑑別診断への貢献という 3 点の学術的意義と、(1) 認知的視点からの対人的困難に関するアセスメントへの応用、(2) 今後の DSM の改訂における貢献、(3) 青年の自己理解・他者理解への応用という 3 点の臨床的意義を論じた。

最後に、本論文の限界点と今後の展望を述べた。本論文の限界点としては、測定手法や測定内容における限界点と、DSM における他の精神障害・精神症状との関連を検討していない点が挙げられた。今後の展望としては、これらの限界点を踏まえた検討を行うことや、今後の DSM の改訂に向けた直接的な検討、および PD 傾向の適応的機能の探求が挙げられた。

(3,995 字)